

式辞

穏やかに柔らかな春の訪れを感じる今日の佳き日に、ご来賓の皆様並びに保護者の皆様方の御臨席のもと、令和五年度の卒業証書授与式を挙げていきますこと、私共教職員の大きな喜びであります。保護者の皆様には、三年間にわたり、本校の教育に対する御理解と御協力をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。

本日の主役である三年生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは、入学当初から、かなり少ない人数で高校生活を送ってきました。少ないからこそ「できること・しやすいこと」がある一方で、人間関係や学校行事への対応などでは「難しかったこと・やりにくかったこと」もあり、色々考えさせられる日々であったと想像します。

皆さんは、四月から大学や専門学校といった場で学びを深めたり、職に就いて、実社会の一員として活動したりすることになります。言い方を換えれば、新たなステージで自分の力を試しつつ、高めていく毎日を過ごすことになるのです。恐らく、これまでの状況とは一変し、周りの大人による「手取り足取り」のお膳立てや、時には「余計なお世話」と感じられるような指示は、極端に少なくなります。人によっては、「どうすればよいのか分からない」「何をしても上手くいかない」など、「力のなさが露わになる」という、厳しい状況に置かれることもあるでしょう。

こうした状況を克服するためのチャレンジを、力を発揮すべきときまで、辛抱強く続けていくことしか、力をつける方法はありません。しかし、「チャレンジしよう」と決心し、色々と考え始めても、なかなか計画を立てられず、肝心な一歩が踏み出せないということも考えられます。

さて、この「まずは計画」という発想ですが、「PDCAサイクルに従って行動する」ことだとも言えます。この「PDCAサイクル」とは、ビジネスにおいて、効率的に最大限の効果を生み出すために、先を見据えて計画(Plan)を立てて、それに従って行動する(DO)ことにより、目標に向かって無駄なく行動できるという発想です。自分の行動を管理するという点が重視され、日常生活にも活かせると言われていました。

ところで、私たちが何か行動を起こすとき、常に「計画性があり、先を見据えている」と言えるでしょうか。むしろ、流れの中で「そうせざるを得なくなった」とか、与えられた課題や仕事に取り組んでいたなら、「気づいたら、そうすることになっていた」ということは、十分考えられます。つまり、明確な意志や、目標・計画に従ったという訳ではなく、やるべきこと、あるいはやりたいことを真剣に行っていたら、自然に次のハードルが現れて、それを乗り越えようと、チャレンジすることになっていたということです。

「先のことなど考える必要がない」と、言っている訳ではありません。むしろ、一人ひとりがどんな自分になりたいのか、どんな社会であれば、自分も他の人も幸せに暮らせるのかということを考えることは、極めて重要であり、価値のあることです。例えば2040年、皆さんが会社や地域を引っ張っていく存在として、あるいは、子を育てる親となっている頃かもしれません。この2040年に、皆さんがイキイキと生きる、ワクワクしながら毎日生活できるようにするために、「何が必要か・この先どうしていくべきか」を考えることは、時代や社会の主役となる皆さんが果たすべき重要な役割です。しかし、将来は現在の延長線上にあるのですから、現在の自分自身や他の人たちの状況をきちんと捉える、そのために状況を観察しながら存在している小さな問題を、一つずつ解消していくことこそ、確実に効果が出て、夢や希望が持てる将来を創ることにつながります。

皆さん、まずは、目の前のことに全力で取り組みましょう。「誰かに頼まれたこと」や「やらないといけないこと」に、真剣に取り組みましょう。そうする中で、「うまくいかない」とか「手間がかかる」など、経験した苦労や不満、違和感を、何とか改善できないかと考えてみることです。このプロセスで、最初は「意味も分からずやっていた」「嫌々やらされていた」ことが、「意味を理解し、自分でやっている」ことへと変化します。これこそ、主体的なチャレンジの第一歩です。こうして、自分自身の力をつけ、眠っている可能性、気づいていなかった特長に目をむけながら、能力に変えていきましょう。

皆さん一人ひとりが積極的にチャレンジを続けるその先に、多くの人たちが幸せに暮らせる社会が創造されると信じて、何よりも、皆さんがその主役になっていくことを期待して、式辞とします。

令和六年三月一日

愛知県立犬山総合高等学校長
森 也寸司